

与謝野晶子と中国-一九二〇年代前半に翻訳された評論について-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2012-06-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 張, 競 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/13068

与謝野晶子と中国

——一九二〇年代前半に翻訳された評論について

張 競

明治後期から大正にかけて、与謝野晶子は短歌を作るかたわら、多くの社会評論を執筆した。その内容は社会批評から女性評論、女子教育、恋愛や結婚などにいたるまで、多彩多様にわたる。

その旺盛な評論活動は中国でも注目され、一九一〇年代の後半からしだいに中国の新聞や雑誌に翻訳されるようになった。与謝野晶子を最初に中国で紹介したのは周作人である。大正七年に訳された「貞操は道德より尊貴である」は「貞操論」というタイトルで発表されると、たちまち胡適などの文化エリートたちを巻き込んだ大論争を引き起こした。それをきっかけに、与謝野晶子の名前も知識人や青年学生のあいだで広く知られるようになった。^(注1)

ところが、与謝野晶子の評論が本格的に翻訳され始めたのは、大正十一年の頃であった。その理由はいくつかあげられる。一つは女性問題を取り上げるメディアの誕生である。女性雑誌が登場し、男尊女卑、女性解放、女子教育などの問題を議論する場ができたからだ。二つ目の理由は与謝野晶子の評論に注目し、その翻訳紹介に力を注いだ人物が現れ

たからだ。とくに日本に留学した張嫻という女性は、晶子の評論を次々と訳しては女性誌に発表した。

そうした背景のもとで、晶子の評論は新聞や雑誌に多く見られるようになった。一九二五年までに二十篇前後の評論が発表され、そのほとんどは女性雑誌に掲載された。一九二六年には、それまでに訳された評論が『与謝野晶子論文集』に収録され、開明書店から単行本として刊行された。

中国における与謝野晶子の翻訳紹介については、これまでいくつかの研究で取り上げられてきた。そうした研究は、与謝野晶子の評論が中国でどのように受容され、同時代の中国文化や中国の作家にどんな影響を及ぼしたかなどについて考察するのが主であった。^(注2)

それに対し、どのような作品が翻訳され、どこで掲載されたかなど、書誌学的な論考は比較的少ない。管見によると、翻訳の問題につれて触れたのはただ二篇だけである。一つは拙稿「晶子と中国の女性運動——一九二〇年代の女性評論をめぐって」^(注3)である。そのなかで、『婦女雑誌』に掲載された評論が取り上げ、翻訳の背景ならびに中国における歴史の意味とその影響について検証を行った。もう一つは秋吉収氏「魯迅と与謝野晶子——『草』を媒介として」^(注4)である。この論文はもともと翻訳問題を扱っていないが、注の中には『現代婦女』と『婦女週報』に掲載された訳文の一部がリストアップされている。

しかし、右の拙稿ではいくつかの翻訳を取り上げただけで、訳された晶子の作品について、全体像は明らかにしていない。また、一部の翻訳について、原文の確認ができていなかったものもある。たとえば、「女子の自修自学」については、右の拙稿を執筆した当時、原文はまだ不明のままであった。そのため、訳文と原作との照合作業もできず、また、訳者である張嫻についての調査もほとんど進展はなかった。

秋吉収氏の論文は注の形式とはいえ、はじめて『現代婦女』と『婦女週報』に掲載された晶子の文章を紹介された。

ただ、挙げられた訳文のリストにはやや不備が認められ、たとえば『現代婦女』第十二期に掲載された「婦女と自尊」はリストから漏れている。^(注5) また、リストに挙げられた八篇の訳文はいずれも中国語のタイトルだけで、原文との照合は行われていない。

本稿では、一九二〇年代前半の中国において、与謝野晶子の評論は全部で果たしてどのぐらい翻訳され、具体的にどういった作品が含まれているのか、その内容を明らかにしたい。また、訳者は誰で、とくに主要な翻訳者である張嬾はどのような人物で、彼女はなぜ与謝野晶子の評論を訳したか、さらにはそうした翻訳紹介は当時どのような意味を持っていたのか、などの問題について考察したい。

一、翻訳された評論の全体像

中国における与謝野晶子の翻訳紹介は、ほとんど女性性論や社会批評に集中している。短歌の翻訳はまったくなかったわけではない。周作人は「日本の詩歌」のなかで、次の三首を訳して紹介した。

咀ひ歌書きかさねたる反古とりて黒き胡蝶を抑へぬるかな

遠方のものの声よりおぼつかな緑の中のみるがほの花

秋くれば手に拾ひたる小石にも遠き命のある心地する

しかし、与謝野晶子の短歌が翻訳・紹介されたのはそれだけで、以後、翻訳は途絶えてしまった。中国には短詩型の

与謝野晶子と中国——一九二〇年代前半に翻訳された評論について

詩歌を創作する伝統がなかったため、短歌のような短い詩を鑑賞する文学的基盤がなかったからであろう。一九一〇年代に入ってから、日本の短歌、俳句やタゴールなどの影響で一時「小詩」という短い詩が創作されるようになった。^(注6)しかし、「小詩」の創作は長続きはしなかった。文学的な審美眼の違いにより、近代中国では周作人を除いて、同時代の日本の短歌を翻訳し、紹介する人はほとんどいなかった。

一九一〇年代の後半から一九二〇年代半ば頃の中国では、与謝野晶子は歌人というよりも、むしろ女性問題や社会問題の評論家として知られていた。きっかけは、前述の「貞操は道徳より尊貴である」の翻訳である。訳者である周作人は当時北京大学の教授で、著名な文化人でもあった。その周作人が訳し、しかも高く評価したから、多くの読者を獲得したというのも不思議なことではない。

ただ、与謝野晶子の評論が新聞の文芸欄^(注7)や雑誌に多く翻訳、掲載されるようになったのは、一九二〇年以降のことである。とくに張嫻という女性翻訳者の努力に負うところが大きい。

同じ頃から与謝野晶子を紹介する社会的な条件も整った。五四運動以降、社会意識が変わり初め、女性問題に対する関心がしだいに高くなった。とくに一九二〇年代に入ってから、中国社会の急速な変貌にともない、女性差別をなくし、女性の社会的地位の向上は、近代化を実現させるための条件と見られるようになった。

女性問題の言論を掲載するメディアが急速に増えたのは、中国における晶子の翻訳・紹介にとって力強い追い風となった。一九一〇年代に男性の文化エリートたちがすでに問題を提起したが、はじめは「荒野で叫んでいるようなもの」^(注8)で、一部のインテリを除いて、ほとんど反応はなかった。しかし、女子教育が緩やかに発展するなかで、この問題に関心を持つ女性が徐々に増えてきた。やがて、彼女らも自らそうした議論に加わるようになった。男女問題や婦人解放を唱える雑誌が次から次へと登場することは、女性問題についての女性による議論の場を提供した。

女性読者層の形成にともない、婦人解放問題を取り上げる女性誌はさらに数を増やしていった。さかのほれば、女性誌そのものは辛亥革命後にすでにくつつか発行されていた。たとえば、『婦女時報』が一九一二年に創刊され、二年後に『女子世界』が登場した。当時もっとも大きい出版社の一つである商務印書館が発行した『婦女雜誌』も一九一五年にお目見えした。しかし、それらの雑誌は読み物を中心としており、思想的にはむしろ儒学的な男女観にもとづいていた。

一九二〇年代に入ると、女性問題を論じる新しいタイプの雑誌が次々と登場した。一九二〇年一月に『新婦女』が創刊され、同じ年の五月には『婦女評論』が刊行された。この二誌と相前後して、『解放畫報』（一九二〇年五月創刊）、『労働與婦女』（一九二二年二月創刊）なども発行された。さまざまな理由でそうした雑誌は必ずしも長続きはしなかった。しかし女性問題を取り上げる雑誌が次々と創刊されたことは、社会的関心の広さを反映したことはまちがいない。

そのような状況のもとで、従来の女性誌も変わり始めた。たとえば、『婦女雜誌』は一九二一年に編集長が更迭され、編集方針と掲載内容が一新された。

雑誌だけでなく、新聞でも女性解放問題を取り上げるようになった。『民国日報』は一九二二年八月三日から『婦人評論』と題する「副刊」（注7参照）を発行した。週一回の刊行だが、毎回四面から構成されていた。『民国日報』の「女性欄」という形を取っているが、実質上、週刊女性紙と見てよい。(注9)

そうした新聞や雑誌の登場は女性解放に関する言論に発表の場を提供しただけでなく、一般読者の投書による参加も可能にした。一九二二年以降、与謝野晶子の女性評論が多く翻訳された背後には、そのような時代的背景があった。

与謝野晶子の女性評論はおもに『婦女週報』、『現代婦女』および改革後の『婦女雜誌』などに掲載されている。表(一)は掲載順にまとめられた翻訳リストである(表中の「評論題名」は単行本収録時のタイトルにした。初出の題名につい

表(-) 中国語に翻訳された与謝野晶子評論の一覧表(掲載順)

評論題名	中文題名	訳者名 (新聞・雑誌掲載時)	訳文の 掲載紙・誌	訳文の 発表年月	『与謝野晶子論文集』 の収録状況
貞操は道德より 尊貴である	貞操論	周作人	『新青年』 第四卷第五号	1918. 5	収録、p. 146
女子の経済独立 と家庭	女子の経済独立 與家庭	幼雄	『婦女雜誌』 第七卷第十一号	1921.11	収録、p. 157
恋愛と性欲	恋愛與性欲	瑟	『婦女雜誌』 第八卷第八号	1922. 8	収録、p. 133
女子は道德的 である	女子は道德的	瑟	『婦女雜誌』 第八卷第八号	1922. 8	収録、p. 128
三種の結婚	結婚の三種的 目的	VT	『現代婦女』 第八期	1922.11.16	収録、p. 129
婦女と自尊	婦女與自尊	梓生	『現代婦女』 第十二期	1922.12.26	収録、p. 42
貞操を破るのは 男子	破壊貞操的是 男子	奚明	『婦女週報』 第十五期	1923.11.28	収録されていない
聡明な男子 たちに	給聡明的男子 們	張嫻	『婦女雜誌』 第十卷三号	1924. 3	収録、p. 1
女子の活動する 領域	女子活動的 領域	無競	『婦女雜誌』 第十卷第十二号	1924.12	収録、p. 19
新道德の要求	新道德的 要求	張嫻	『婦女雜誌』 第十一卷第二号	1925. 2	収録、p. 44
「女らしさ」と は何か	什麼是「女 様」	CY	『婦女雜誌』 第十一卷第五号	1925. 5	収録、p. 24
女子の自修自 学	女子的自修 自學	無競	『婦女雜誌』 第十一卷第六号	1925. 6	収録、p. 66
女子と高等 教育	女子與高等 教育	張嫻	『婦女雜誌』 第十一卷第六号	1925. 6	収録、p. 94
一つの覚え 書き	私的備忘 録	張嫻	『婦女雜誌』 第十一卷第七号	1925. 7	収録、p. 134
女子理性の 恢復	女子理性的 恢復	張嫻	『婦女週報』 第九十四期	1925. 7. 5	収録、p. 15
女子の智力を 高めよ	提高女子的 智力	張嫻	『婦女週報』 第九十七期	1925. 7.26	収録、p. 37
婦女と文学	婦女與文学	張嫻	『婦女週報』 第九十八期	1925. 8. 2	収録、p. 110
文学を志す若 き婦人達に	給有志文学 的の女青年	張嫻	『婦女週報』 第九十九期	1925. 8. 9	収録、p. 102
婦人の禁酒 運動に反対 する	反對婦女的 禁酒運動	CY	『婦女週報』 第百期	1925. 8.16	収録、p. 115
自己に生きる 婦人	婦女與新 生活		未確認		収録、p. 48
人間生活へ	到人間の 生活		未確認		収録、p. 61
生活の変化	生活的 變化		未確認		収録、p. 114
都会へ来たい 女子達へ	給想到都 會的的女子 們		未確認		収録、p. 119
神戸の貧民 窟を觀て	看了神戶 的貧民窟 以後		未確認		収録、p. 143

ては表(二)をご参照下さい)。これを見ると、『婦女雜誌』に発表されたものがもっとも多く、十篇にものぼる。以下『婦女週報』の六篇、『現代婦女』二篇、『新青年』一篇の順になっている。

そうした評論はほとんど一九二二年から一九二五年のあいだに翻訳された。本稿を執筆した時点で雑誌掲載がまだ確認されていない五篇をのぞけば、ほかは全部一九一八年から一九二五年のあいだに翻訳されるものである。『与謝野晶子論文集』の訳者序によると、収録された翻訳は一部未発表のものも含まれているという。掲載が未確認の文章は単行本のために新たに訳されたのかもしれない。したがって、遅くとも単行本が印刷された一九二六年二月までにはすでに訳されていた。^(注10)なお「貞操を破るのは男子」は『婦女週報』に刊載されたものの、『与謝野晶子論文集』には収録されていない。また、この評論の訳文の題名は『婦女週報』の目次に「破壊貞操的は男子」とあるが、本文には「破貞操的は男子」になっている。中国語の表現として前者が自然だから、後者はおそらく誤植であろう。表(一)は目次の表記に従うことにした。

発表の年代別に見ると、もっとも多いのは一九二五年で、十篇にのぼる。以下、一九二二年は四篇、一九二四年には二篇、一九一八年、一九二二年および一九二三年にはそれぞれ一篇の順になっている。

評論の内容はほとんど女性解放問題に関連している。大まかに分けると、次の三種類にまとめられる。

(一) 男女平等の問題

(二) 女性の経済独立と社会進出の問題

(三) 女子教育の問題

選択の基準や翻訳の意味については、第三節でさらに詳しく述べたいが、以上の分類から、翻訳は日本文化の紹介を目的としたのではなく、中国社会における意味と役割が選択の基準とされたことがうかがえる。その意味では、与謝野

与謝野晶子と中国——一九二〇年代前半に翻訳された評論について

晶子の社会評論は「日本」思想として紹介されたのではなく、普遍性のある「近代的な」思想として中国に導入されたといえる。

二、知られざる翻訳者の素顔

与謝野晶子の評論の翻訳者として、周作人、黄幼雄、張嫻、瑟、VT、梓生、無競、奚明、CYといった名前が挙げられる。そのなかで、周作人がもっとも知名度が高い。彼は鋭い選択眼で与謝野晶子の評論を翻訳し、その名を一夜のうち言論界に轟かせた。周作人が翻訳したのはこの一編だけだが、中国社会に与えた影響においては、晶子の評論のなかでもっとも大きかったであろう。

それに比べて、与謝野晶子の評論をもっとも多く、かつもっとも精力的に翻訳したのが張嫻である。彼女は周作人と違い、当時ではほとんどその名が知られていなかった。

もう一人の訳者は黄幼雄である。一時、女性雑誌で盛んな執筆活動を行い、婦女解放を唱える言論活動の先頭に立っていた。張嫻よりも早く晶子の評論を訳したが、現時点で確認できるのは一篇だけである。

前節に掲げた表を見ると、右の三人のほかに瑟、VT、梓生、無競、奚明、CYなど、翻訳者が多くいたように見える。しかも身元が判明できないようなペンネームばかりである。幸いなことに一九二六年に出版された『与謝野晶子論文集』はこの謎を解いてくれた。この単行本の翻訳者は張嫻となっていて、訳者序によると、実際は周作人が訳した「貞操は道徳より尊貴である」と黄幼雄が訳した「女子の経済独立と家庭」も収められている。ただ、それ以外の二十一篇はすべて張嫻が翻訳したものだという。そこで、雑誌掲載時の署名と対照すると(表1参照)、瑟、VT、梓生、

無競、奚明、CYなどはいずれも張嫻のペンネームということが明らかになる。つまり、実質上、与謝野晶子を訳したのは三人だけであった。

ところで、張嫻とはどんな人物だったのか。与謝野晶子が単行本に寄せた「原著者序」によると、張嫻はかつて日本に留学したことがある女性で、一九二六年現在、「中華民国江蘇蘇州滄野關省立蠶業學校教授」を勤めているという。それらの個人情報は、訳者である張嫻が自ら与謝野晶子に提供したと思われる。『与謝野晶子論文集』を刊行する前に、訳者は原作者に手紙を書き、序文の執筆を依頼した。晶子はおそらくその手紙から張嫻のことを知り、著者序に書いたのであろう。

張嫻は一九二二年頃から、与謝野晶子をはじめ日本の女性評論を翻訳紹介しはじめた。ただ、翻訳だけでなく、同時に女性問題についての評論も多く書いていた。一時、女性誌で盛んな執筆活動を展開していたが、一九二〇年代の後半から、メディアでの言論活動が目立って少なくなり、その後消息がわからなくなった。その経歴は長いあいだ謎に包まれたままであった。

一九二四年六月に発行された『婦女雜誌』第十卷第六号では「職業問題号」特集が組まれ、女性の就職問題が取り上げられた。特集の前半には女性解放にとつて、職業に就く重要性を唱える論文が掲載され、アメリカ、フランス、日本など海外女性の就職状況が紹介されている。後半は中国女性の就職状況が議論され、どのようにすれば職業を持つことができるかについて、具体例をあげて紹介されている。当時まだ珍しかった専門職に従事していた女性たちに多数登場させ、彼女らが如何に職業を手に入れたかについて、自らの略歴をまじえながら語らせた。一応、投稿掲載の形を取っているが、実際は投稿者の中に、すでに女性誌を中心に活躍していた人たちも含まれている。身近な女性にも成功例がある、ということを読者に示し、経済的自立の方法について具体的な手ほどきするのが目的であろう。ただ、執筆者は

ほとんどがインテリで、肉体労働に従事する女性たちは事実上除外されていた。

そのなかに、偶然に張嫻が執筆したエッセーが入っている。現時点において彼女の経歴を確認できる唯一の資料である。おかげで張嫻の生い立ちや経歴についてある程度知ることができるようになった。

「実習室の内外」^(注1)と題するエッセーのなかで、張嫻は自らの経歴について簡単に紹介している。ただ、生年月日も出生地も記されていない。そのエッセーによると、彼女は子供のころ無錫で過ごし、小学校も無錫で通っていた。高等小学校を卒業した頃、両親とともに無錫から上海に転居したという。当時、女性が中学校以上の教育を受けるのはまだ非常に稀で、張嫻の両親も彼女が上級の学校へ進学することを認めなかった。しかも、一家の転居先はたまたま上海の東北部に位置する楊樹浦地区にある。当時、煙突が林立する楊樹浦は工業地帯として知られ、貧しい労働者たちが多く居住していた。張嫻の家のはろくな中学校もなかった。そうした原因で、十三歳から十六歳までずっと教育を受ける機会をえられず、家で過ごしていた。しかし彼女は将来職業につき、経済的に独立したいとずっと思っていた。そのため、進学希望を捨てず、再び学校に行かせてくれるよう、たえず両親に懇願していた。辛抱強い説得の甲斐があった、彼女の両親はついに進学することに同意した。

張嫻の友人には、滄墅關蠶業学校を卒業したばかりの人がいた。その友人のアドバイスで、彼女は養蚕学校に進学しようとしたが、張嫻の兄は彼女に医学の勉強をした方がいいと言ひ、姉は南京女子師範に入るよう勧めた。彼女の両親も最初は養蚕学校の進学には反対していた。しかし本人の意志が固く、あくまでも滄墅關蠶業学校を目指していた。幸い試験にも合格し、長年の念願はついに叶えられた。

滄墅關は蘇州の西北方向の郊外にある小さい町で、そこにある滄墅關蠶業学校で勉学するには、寮生活をしなければならぬ。しかし彼女は勉強が好きで、家族から離れて生活するのをまったく苦にできなかった。それどころか、集団生

活をことのほか楽しみ、友人との付き合いから多くのことを学んだ。また、実習を通して、体力が要る養蚕の実技も好きになり、この仕事は女性にとって最高の職業だと思ふまでにいたった。

張嫻の実家は経済的にかなり恵まれていたようで、彼女は五年間におよぶ蠶業学校での生活を終えると、ただちに海をわたって日本に留学した。二十一歳のときであった。数ヶ月の語学訓練を受けた後、東京高等蠶校女子部に入學し、蠶糸科で勉強しはじめた。三年間にわたる留学期間のあいだに、一年半の時間は実習で、製糸技術を身につけることができた。卒業してからすぐに帰国し、母校に招かれて製糸科の教員となった。ただ、本人は教員という職業に満足していない。エッセーの最後に、将来、製糸会社を創立し、より多くの女性たちに職業を提供したい、という希望が綴られている。

与謝野晶子との出会いについては、エッセーのなかでまったく触れられていない。また、『与謝野晶子論文集』に寄せる「原著者序」を見ても、留学中、両者のあいだに付き合いはなかったようだ。おそらく二人はずっと面識はなかったであろう。後で詳述するように、与謝野晶子の評論を訳したのは、ただ晶子の文章を読んでその内容を高く評価したからである。

晶子の評論はほとんどの場合、まず新聞か雑誌に掲載され、それから単行本に収録される。記者が何に依拠したかについて考えるとき、初出の確定が不可欠な基礎作業になる。表(二)はそれをまとめた一覧である。

表(二)からうかがえるように、張嫻が翻訳した評論は『文化生活研究』に収められた「女子の自修自学」を除けば、全部『愛、理性及び勇氣』、『激動の中を行く』、『女人創造』、『人間礼拝』の中にある文章である。翻訳された評論には初出のタイトルと単行本収録時のタイトルとが違うものが含まれている。しかし、訳文のタイトルはすべて初出ではなく、単行本収録時のタイトルになっている。すなわち訳者が依拠したのはこの四冊の評論集と『文化生活研究』である。

表(二) 中国語に訳された与謝野晶子評論の初出一覧表 (掲載順)

評論題名	新聞・雑誌初出 タイトル	初出 年月日	単行文収録状況	単行本の 発表年月	『与謝野晶子全集』 の収録状況
貞操は道徳より尊貴である	未確認		『人及び女として』 天弦堂書房	大正五年 四月	第十五巻、p. 3
恋愛と性欲	『対鏡新語』『女学世界』 第17巻第3号、p. 17 ～18	大正六年三月	『愛、理性及び勇氣』 阿蘭陀書房	大正六年 十月	第十六巻、p. 124
女子は道徳的である	『対鏡新語』『女学世界』 第17巻第3号、p. 32 ～33	大正六年三月	『愛、理性及び勇氣』 阿蘭陀書房	大正六年 十月	第十六巻、p. 33
三種の結婚	『最近の感想(一)』 『横浜貿易新報』	大正六年三月	『愛、理性及び勇氣』 阿蘭陀書房	大正六年 十月	第十六巻、p. 106
婦女と自尊	『対鏡新語』『女学世界』 第17巻第3号、p. 29 ～30	大正六年三月	『愛、理性及び勇氣』 阿蘭陀書房	大正六年 十月	第十六巻、p. 27
貞操を破るのは男子	『対鏡新語』『女学世界』 第17巻第3号、p. 29 ～30	大正六年三月	『愛、理性及び勇氣』 阿蘭陀書房	大正六年 十月	第十六巻、p. 31
聡明な男子たちに	『日本婦人に代わりて 訴ふ』『雄弁』	大正八年四月	『女人創造』白水社	大正九年 五月	第十七巻、p. 575
女子の活動する領域	『最近の感想』 『横浜貿易新報』	大正九年 二月二十二日	『女人創造』白水社	大正九年 五月	第十七巻、p. 455
新道徳の要求	『最近の感想(三)』 『横浜貿易新報』	大正六年一月 二十八日	『愛、理性及び勇氣』 阿蘭陀書房	大正六年 十月	第十六巻、p. 99
「女らしさ」とは何か	同題、『婦人倶楽部』	大正十年二月	『人間礼拝』天祐社	大正十年 三月	第十八巻、p. 253
女子の自修自学	同題、『文化生活研究』	大正十年十一月	収録されていない		収録されていない
女子と高等教育	未確認		『女人創造』白水社	大正九年 五月	第十七巻、p. 588
一つの覚書	未確認		『人間礼拝』天祐社	大正十年 三月	第十八巻、p. 5
女子理性の恢復	『最近の感想(四)』 『横浜貿易新報』	大正六年二月 十一日	『愛、理性及び勇氣』 阿蘭陀書房	大正六年 十月	第十六巻、p. 131
女子の智力を高めよ	同題、『横浜貿易新報』	大正八年 三月三十日	『激動の中を行く』 アルス	大正八年 八月	第十七巻、p. 279
婦女と文学	未確認		『愛、理性及び勇氣』 阿蘭陀書房	大正六年 十月	第十六巻、p. 157
文学を志す若き婦人達に	同題、『横浜貿易新報』	大正六年 一月一日	『愛、理性及び勇氣』 阿蘭陀書房	大正六年 十月	第十六巻、p. 7
婦人の禁酒運動に反対す	『婦人の禁酒運動』 『横浜貿易新報』	大正八年 一月二十六日	『激動の中を行く』 アルス	大正八年 八月	第十七巻、p. 299
自己に生きる婦人	同題、『大阪毎日新聞』	大正九年 六月五～八日	『人間礼拝』天祐社	大正十年 三月	第十八巻、p. 23
人間生活へ	同題、『横浜貿易新報』	大正九年 十一月二十一日	『人間礼拝』天祐社	大正十年 三月	第十八巻、p. 12
生活の変化	『対鏡新語』『女学世界』 第17巻第3号、p. 14	大正六年三月	『愛、理性及び勇氣』 阿蘭陀書房	大正六年 十月	第十六巻、p. 119
都会へ来たい女子達へ	未確認		『人間礼拝』天祐社	大正十年 三月	第十八巻、p. 115
神戸の貧民窟を觀て	『旅より帰って』 『横浜貿易新報』	大正九年 五月十六日	『人間礼拝』天祐社	大正十年 三月	第十八巻、p. 72
(原著者序)	『蘭邦の若き友へ』 『横浜貿易新報』	大正十四年 十月十八日	収録されていない		収録されていない

ことはばまちがない。

ところで、なぜこの四冊の評論集が選ばれたのか。単行本の刊行年月を見ると、第五評論集『愛、理性及び勇氣』は大正五年の終わりから大正六年半ば過ぎのあいだに書かれた文章を収録し、大正六年十月に阿蘭陀書房から刊行された。第八評論集『激動の中を行く』は大正八年一月から七月頃のあいだに書かれた文章を収録し、大正八年八月にアルスから刊行された。第九評論集『女人創造』は主に大正八年後半から大正九年前半までに書かれた文章を収録し、大正九年五月に白水社から刊行された。そして、第十評論集『人間礼拝』は大正九年から大正十年のはじめに書かれた評論が中心だが、過去の評論集に収録されていなかった文章も一部入れられている。なお、同書が天祐社から刊行されたのは、大正十年三月のことである。以上の四冊はいずれも大正十年以前に出版されている。ちなみに「女子の自修自学」が収録された『文化生活研究』も大正十年十一月に発行されたものである。

与謝野晶子は、大正十年三月に第十評論集『人間礼拝』を出してから、二年のあいだに単行文の評論集を出していない。次の評論集が出たのは二年後の大正十二年四月に刊行された『愛の創作』である。しかし、『与謝野晶子論文集』には『愛の創作』以降の作品は訳されていない。張嫻は一九二二年から一九二五年までのあいだに立て続けに晶子の評論を翻訳した。なかでもとくに一九二五年に十篇前後の評論を訳し、四年のあいだにもっとも翻訳の多い年である。

『愛の創作』は一九二三年四月に刊行されたから、本来、遅くとも翌年には入手ができたはずである。与謝野晶子が書いた評論の内容を見ると、『愛の創作』以降もひきつづき女性問題について論じている。したがって、内容が原因で『愛の創作』以降の文章が除外されたわけではない。唯一考えられるのは、当時『愛の創作』以降の評論集はまだ翻訳者の手元になかったことである。

そうしたことを総合すると、張嫻が依拠した四冊の評論はいずれも中国で購入したのではなく、帰国のとき日本から

持ち帰ったものである可能性はきわめて高い。そして、彼女が中国に帰国したのは『愛の創作』が刊行された以前、つまり一九二三年四月より前のこともほぼ推定できる。逆算すると、張嫻は一八九八年か一八九九年の生まれ、ということになる。

三、なぜ晶子を訳したか

張嫻は与謝野晶子の評論だけでなく、市川房枝「アメリカの職業婦人」、有島武郎「婦人自身の覚醒」、河田皓郎「女権から人権へ」、藤森成吉「女性の本質」、中村吉蔵「賢母良妻と愚母悪妻」、生田長江「婦女非解放論の浅薄」など、女性問題に関する文章を多数、中国語に翻訳、紹介した。ただ、なかでも与謝野晶子の翻訳はもっとも多く、しかも比較的に影響が大きい。

ところで、なぜ彼女は与謝野晶子の批評活動にそれほど注目し、翻訳しようと思うようになったのか。そのことを明らかにするためには、張嫻自らの証言を検証しなければならない。『与謝野晶子論文集』の訳者序のなかで彼女は次のように語っている。

わたしは与謝野晶子の評論を翻訳したのは、(中略)与謝野晶子の非常に進歩的で自由な思想、きわめて真摯で誠実な態度、きわめて正大で公平な議論は彼女の国の青年男女を感化させたからだ。わが国の青年男女は長年来、束縛と制約を受けただけに、熱烈に解放を望んでいる。(彼らのためにも)ぜひ紹介する必要があると思ったから

こそ、力不足を承知の上あえて翻訳した。^(注12)

与謝野晶子の評論が日本の「青年男女を感化させた」という印象は日本留学中に受けたのであろう。留学先の東京高等蠶校女子部で同級生たちが与謝野晶子の評論を熱心に読んでいたのを目撃したのかもしれない。もしかすると、同級生の紹介ではじめて晶子の評論を知った可能性もある。ただ、与謝野晶子にたくに興味を持ったのは、やはり晶子が書いた評論の内容に共鳴したからであらう。なぜなら、当時日本には女性の評論家ははかにも多くいたからだ。もし思想的な共鳴がなければ、帰国した後、ずっと翻訳を続けることもなかったであらう。

注目すべきは、翻訳の理由である。張嫻は与謝野晶子の女性評論が日本にとって有用であるからだけでなく、中国の社会改革にも役に立つと思つたから、翻訳したのだ、と証言した。右の言葉から見られるように、彼女は中国の「青年男女は長年来、束縛と制約を受けただけに、熱烈に解放を望んでいる」から、晶子の評論はきつと彼らを啓蒙し、女性解放への道に導くだろうと信じていた。

与謝野晶子の評論には旧い道德観や男女差別を批判し、女性が教育を受ける権利、経済的独立の必要性を訴えるものが多い。それが訳者である張嫻がもっとも評価するところである。与謝野晶子の言論が中国にも役立つと考えた理由について、張嫻は訳者序のなかで、「中日の国情はほとんど同じで、なかでも家族制度や男尊女卑の意識などは共通している。だから、たとえこの論集のなかの文章がすべて中国のために執筆されたものだと言っても言い過ぎではないだろうと思う」と述べている。晶子の評論は中国にもそのまま通用するのが晶子を選んだ最大の原因だ、と自ら翻訳の動機を明かした。

張嫻の手になる中国語訳を見ると、訳文は原文の初出順あるいは単行本の収録順と一致しないことがわかる(表(二)参照)。そのことから、逆に翻訳の対象がどのような基準で選ばれたかをうかがうこともできる。つまり、何を訳すかは、日本での社会的意義や反響よりも、むしろ中国の言論動向との関係性を考えた上で決められた。たとえば、「女子

の自修自学」と「女子と高等教育」は『婦女評論』第十一卷第六号の「女学生号」特集に掲載され、「恋愛と性欲」「女子は道德的である」は恋愛の自由についての誌上論争が起きたときに訳されたものである。

前に触れたように、張嬾によって翻訳された与謝野晶子の評論はすべて『愛、理性及び勇氣』、『激動の中を行く』、『女人創造』、『人間礼拝』および『文化生活研究』の中に収められている。ただ、四冊の評論集からは平均的に訳されたのではない。たとえば、『愛、理性及び勇氣』からは十篇訳され、もっとも多い。つづいて『人間礼拝』の六篇、『女人創造』は三篇である。『激動の中を行く』は一篇だけで、もっとも少ない。

内容から見ると、翻訳された晶子の評論がだいたい三種類に分類できることは、前に述べた通りである。ただ、この三者は互いに関連して、はっきりと一線を引くのが難しい。与謝野晶子の評論のなかでも三つの問題がともに論じられた場合がある。そうした観点は女性解放運動にとって非常に重要で、晶子の思想においても中核をなしている。

右に挙げた三種類の中で、もっとも多いのは男女平等の必要性を唱える評論である。『婦女雑誌』や『婦女週報』などに相次いで発表された翻訳を見ると、「聡明な男子たちに」、「女子の活動する領域」、「女らしさ」とは何か、「婦女と自尊」などはすべてこの種の文章である。そうした評論では、女性差別の問題が取り上げられ、男尊女卑の観念は社会にとっていかに有害なのかが鋭く指摘された。また、女性が生まれながらにして男性より能力が劣り、その活動範囲を家庭の中に留めるべきであるという見方に対しても、痛烈な批判が加えられている。恋愛や婚姻についての評論も角度は違うものの、根本的には男女平等の問題に帰着する。その意味では「恋愛と性欲」、「女子は道德的である」、「貞操は道德より尊貴である」などもこの種類の文章で、それぞれ異なる角度から、あるいは間接的に男尊女卑を批判しているといえる。

「女子の経済独立と家庭」、「自己に生きる婦人」などは女性解放と経済独立との関係を論じ、男性と同様の知識、教

養を持つことの重要性が説かれている。経済の独立は女性の社会的地位が向上する前提である。それは与謝野晶子が一貫して持っていた見方である。当時、中国でもこの問題が盛んに論じられており、その流れのなかで晶子のこうした文章が紹介されたのである。

一方、「女子と高等教育」、「女子の自修自学」、「女子の智力を高めよ」、「婦女と文学」などの文章では、教育の必要性ならびに独学を通して教養を高め、有用な知識を身につけることの重要性、およびその方法について述べられた。

右の三種類のほかに、女性解放と直接関係のない文章もある。「一つの覚え書き」は女性論ではなく、与謝野晶子の人生観を表している。また、「婦人の禁酒運動に反対する」では、アメリカの流行を盲目に模倣することに対する批判が行われ、「都会へ来たい女子達へ」では、都会に憧れる女性たちに適切なアドバイスが送られた。いずれも中国の女性たちも知りたい問題に答える文章である。

与謝野晶子がつねづね、女性は男性と同じ人格を持ち、同じ能力を持っているから、男性と同様の社会的な地位を与えられるべきで、女性にだけ特別の道徳観を押しつけるべきではない、と主張している。晶子によると、男性と同じ権利を享有するためには、男尊女卑の古い思想や道徳観を批判し、女性を差別する社会的弊害を正すと同時に、女性も自ら平等の権利を求めなければならない。そのためには生活の上で男性に頼ってはいけな。したがって、女性解放の前提条件は、まず手に職を持ち、経済的に独立することである。

ところが、男性と同様の職業につくためには、教育が不可欠である。女子教育の必要性を唱え、女性にも大学教育の機会を与えなければならないと力説したのは、そのためである。また、女性は自ら積極的に知識の獲得を目指し、独学を含めあらゆる学習の機会を生かさなければならない、ということも説かれている。そうした言論は女性が教育を受ける権利を主張しただけでなく、教育に恵まれていない女性たちに、不利に置かれた立場を乗り越える方法も示された。

晶子のそうした論点は一九二〇年代の中国にとつていずれも先鋭な問題提起となった。また、封建的な男女観や、女性蔑視の古い慣習に対する痛烈で、正鵠を射た批判は中国にもそのまま適用する。否、まるで中国社会にあつたさまたまな旧弊をを想定し、それを指弾するために書かれたかのようだ。そのことについて誰よりもまず訳者である張嫻が気付いた。訳者序のなかで、彼女は次のように述べている。

(与謝野晶子の評論は日本) 国内の読者を意識して書かれたものである。にもかかわらず、中国と日本の国情はきわめて似ており、なかでも家族制度や男尊女卑などはほとんど共通している。だから、このアンソロジーに収録された評論がすべてわが中国のためにわざわざ書き下ろしたものだ、(注14)と言つても過言ではない。

この証言は一九二〇年代の中国で与謝野晶子がいかに見られていたかを知る上で、非常に役に立つ。訳者だけでなく、おそらく読者もそう受け止めたのであろう。近代になってからも、文化意識から生活慣習にいたるまで、儒学の影響が強く残っている点では、日本と中国のあいだに確かに類似点が多い。もちろん、日本は中国より早く近代化に成功し、女性解放においても一歩リードしていた。しかし、与謝野晶子の評論はいまだかつて気付かれていない問題を指摘し、それらの問題を解決するためにどうすればよいかについても、具体的で、かつ実行可能な方法が示されていた。とりわけ、東洋の男尊女卑の急所をついた晶子の批判は共感を呼んだのであろう。

終わりに

中国に翻訳紹介された与謝野晶子の評論は、当時女性誌で展開された議論を想定して翻訳されたものもあれば、問題提起として訳されたものもある。いずれせよ、一九二〇年代前半の中国で女性解放の言説に一定の影響を与えた。中には言論の形成や展開を左右したのも少なくない。

たとえば、黄幼雄が訳した「女子の経済独立と家庭」が発表された前後、『婦女雑誌』だけでも「家庭服務と経済独立」(第六巻第五号)、「婦女の経済独立問題」(第七巻第十一号)、「女子の経済独立問題」(第八巻第一号)、「婦女の独立」(第十巻第四号)、「婦女の経済的独立と職業」(第十巻第六号)などが相次いで掲載された。魯迅は一九二三年十二月に北京女子師範大学で「ノラは家を出てからどうなったか」と題する講演を行い、そのなかで経済力の獲得が女性の自立のもっとも重要な前提条件である、と論じている。この考えは晶子の思想とどのような関係があり、魯迅は晶子の影響を受けたかどうかについてはなお詳細な検証が必要で、現時点ではまだ結論が出せる証拠はない。ただ、魯迅が自ら『婦女雑誌』に寄稿したことを考えると、「女子の経済独立と家庭」という文章を読んだことはほぼまちがいない。与謝野晶子の評論が女性の経済独立という問題を中国ではじめて提起したわけではないが、この問題についての議論に大きく関与し、ある程度影響を与えたことまちがいないだろう。

同じ現象はほかの評論にも見られる。「貞操は道德より尊貴である」という文章は一九一〇年代の中国ですでに大きな論争を巻き起こしたが、一九二〇年代に入ってからますますかの女性誌で何度も取り上げられた。たとえば、一九二二年、『婦女雑誌』は第八巻第十二号に「貞操問題の討論」という特集を組み、この問題が再び誌上で議論され、注目

を集めるようになった。

『与謝野晶子論文集』が出版されてから、どのような評価を受けたかは明らかではない。ただ、同書は三年後の一九二九年に増刷されたから、^(注15) おそらく読者たちに好意的に受け止められ、しかも再版の要望があったのであろう。

魯迅もこの訳書の出版を知っており、しかも、購入したことがある。『与謝野晶子論文集』は上海で出版されたのは一九二六年であったが、その年の九月、魯迅は廈門大学に赴任した。魯迅の教え子で、後に夫人となった許広平は相前して広東省立女子師範学校の教員となった。離ればなれになった二人のあいだに多くの手紙が交わされたが、許広平が魯迅宛に書いた書簡のなかに、次のような一節があった。

いつも上海から書物をお取り寄せになりますが、『文章作法』一冊、開明書店出版、価格七角、を買っていただきませんかでしょうか、それからもう一冊、『与謝野晶子論文集』が買えたらもっとよいのです。^(注16)

この手紙は一九二六年十二月十二日に書かれたもので、『与謝野晶子論文集』が出版された半年後のことである。許広平は書名を知っていたが、広州では手には入らなかったから、魯迅に購入を依頼したのであろう。許広平から書籍購入の依頼を受けて、魯迅は返信の中で次のように返事した。

上海から本を買うのに不都合はありませんから、この二冊はすぐとりよせましょう。だが到着すれば、すぐ送りますでしょうか、それとも年末に手渡ししましょうか。^(注17)

許広平は右の手紙のなかで、「もう三十日あまりたてばお会いすることができます。書物は送るとずいぶん遅く、場合によると、人のほうがさきに来たりするかもしれないから、置いておいて、御自分でお持ちくださるのがいちばんです。しかもなくなったり、こわれたりしなくてすみます」と書いた。^(注18)にもかかわらず、魯迅が「到着すれば、すぐ送りましようか、それとも年末に手渡ししましようか」との返事をした。無意識にいつ書いてしまった可能性もあるが、もしかすると、早く許広平の手元に届けたい、という思いがあったのかもしれない。いずれにせよ、魯迅は『与謝野晶子論文集』を知っているだけでなく、実際に手にしたことはまちがいない。

与謝野晶子の個々の評論が中国でどのように受け入れられ、どんな影響を及ぼしたかについては、これから個別的に検証する必要がある。本稿はあくまでもその全容を把握するために、基礎的な検証を行ったに過ぎない。個々の作品の受容については、今後さらに掘り下げたい。

注

(1) 木原葉子「周作人と与謝野晶子——『貞操論』・『愛の創作』」(東京女子大学編『日本文学』第六十八号、昭和六十二年九月三十日)、拙稿「五四運動前後の中国における西洋文化の受容と日本——与謝野晶子の『貞操論』をめぐる」(東大比較文学会編『比較文学研究』第六十号、恒文社、一九九一年十一月三十日)。なお、後者はのちに書き直され、「東からきた『西洋』——与謝野晶子の貞操論と自由恋愛」という題で、『近代中国と「恋愛」の発見』(岩波書店、一九九五年五月)に収められた。

(2) 注(1) 木原葉子および拙稿参照。

(3) 拙稿「晶子と中国の女性運動——一九二〇年代の女性評論をめぐって」(『鉄幹と晶子』第三号、和泉書院、平成九年十月)、七十五〜九十頁。

(4) 秋吉収「魯迅と与謝野晶子——『草』を媒介として」(『高知女子大学紀要』人文・社会科学編「第四十五巻、一九九七年三月」、十五〜二十六頁)。

- (5) 前出、秋吉収稿、二十四頁。
- (6) 拙稿「海を越えた詩心——与謝野晶子と近代中国の小詩」(アステイオン編集部編『アステイオン』四十六号)。「BSブリタニカ」、一九九七年十月、一九八〜二四頁。
- (7) 原文は「副刊」で、正確に言うると、日本の新聞の文芸欄ではない。通常は新聞の二面分から四面分ぐらいの紙面を占め、新聞の付属刊行物として発行される。週に一回の刊行が多く、どららかといえば、新聞の日曜版に近い。ただ、発行日は必ずしも日曜日とは限らない。
- (8) 「宣言」(『婦女評論』第一期、一九二二年八月三日)。
- (9) 『婦女評論』については南雲智「雑誌『婦女評論』について——附目録——」(『桜美林大学 中国文学論叢』第七号、一九七九年三月、三〇一〜三三六頁)がある。論文の題名にあるように、文末には同雑誌の全目録が付録されている。
- (10) 『与謝野晶子論文集』の奥付によると、同書が印刷に付されたのは一九二六年二月で、発行されたのは同六月である。
- (11) 張嫻「実習室の内外」(『婦女雜誌』第十卷第六号、商務印書館、一九二四年六月、一〇一六頁)。
- (12) 張嫻「序」、(『与謝野晶子論文集』開明書店、一九二六年六月)。
- (13) 前出、張嫻「序」。
- (14) 前出、張嫻「序」。
- (15) 『中国近代現代叢書目録』、商務印書館香港分館、一九八〇年。このことについて、秋吉収の論文(前出、二五頁)ですでに指摘されている。
- (16) 中島長文訳「両地書」(『魯迅全集』十三卷、学習研究社、昭和六十年四月)、三五九頁。なお、秋吉収論文(前出、二十四頁)で魯迅の手紙としたのは誤りである。
- (17) 中島長文訳「両地書」、(前出)、三六七頁。なお、ここで引用したのはもとの書簡のままである。『両地書』とのタイトルで刊行されたとき、「だが到着すれば、すぐ送りましょうか、それとも年末に手渡ししましょうか」という部分は、「そして御命令に従い年末に手渡しいたします」と書き直された。(中島長文訳「両地書」注参照、前出、三六九頁)。
- (18) 前出、中島長文訳「両地書」、三五九頁。